

# 施設キュウリの摘心栽培に関する研究 (第1報) 品種の適応性について

利光泰郎・小田原長治・藤枝国光  
(大分県農業技術センター)

TOSHIMITSU, Y., ODAWARA, C. and FUJIEDA, K.  
Studies on the Topping Culture of Cucumber Plants in Plastic Greenhouses.  
(I) On the Adaptability of Cultivars to the Topping Culture.

施設キュウリの摘心栽培法の確立に資するために生態型の異なる華北系・華南系・雑種系品種について、抑制栽培ならびに半促成栽培で、摘心栽培に対する適応性を検討した。

## Ⅰ 材料および方法

(1) ハウス抑制栽培 「夏系1号」(華北系)・「夏系2号」(雑種系)・「久留米落合H型」(華南系)を9月5日には種、ヒシフォリアにつき木し9月25日に定植した。主枝は25節、側枝は2節で摘心し、夜温は10℃以上に保ち、12月20日まで収穫した。

(2) 半促成栽培 試験(1)の3品種に「夏埼落3号」(雑種系)を加え、2月2日には種、つき木して、3月9日にガラス室に定植した。主枝は20節で摘心し、13℃以上に加温して6月28日まで収穫した。

## Ⅱ 結果および考察

(1) 早生の「夏系1号」は前期の生長は早かったが、後半はカンザシ傾向を呈し、側枝は短く、第13・14節以降は退化側枝になった。晩生の「H型」は初期に軟弱生長を示し、側枝は徒長的に長かったが、後期は茎葉が充実し、正常な生育にもどった。「夏系2号」は両者の中間的な生育反応を示し、均整のとれた草姿を呈した。初期収量は「夏系1号」が多く、後期収量は「H型」がまさり、果形は「夏系1号」が中期まですぐれ、後期に肩流れしやすくなったのに対し、「H型」は始めは果こうが徒長して短形化した。「夏系2号」は収量や果形の反応も両者の中間型で、この作型に対する雑種系品種の有利性を示唆した(第1表)。

(2) 早生の「夏系1号」はカンザシ傾向を呈しながら生長し、側枝は大部分が退化側枝になった。「H型」は晩生で、健全な生育を呈したが、側枝は節間が長きに失し、また後期は葉色がぬけた。「夏系2号」

は中間的な草姿を呈し、側枝もほどよくしまった。

「夏埼落3号」は「H型」に似た生育反応を示したが収穫始めがやや早かった。収量は「夏埼落3号」・「夏系2号」が多く、「H型」がこれらについだ。果形は「H型」が安定したが、後半の果実はブルームが濃く、色がぬけた。「夏埼落3号」・「夏系2号」は初期にやや曲りが多く、「夏系1号」は長果であることもあって、とくに肩流れや、曲り果が目立った。以上のように、この作型でも摘心栽培に対しては雑種系品種の有利性が実証された(第2表)。

第1表 ハウス抑制栽培における生育ならびに収量(1969年)

項目 品種	主枝雌花		側枝 <sup>a</sup>		収量(株当たり)	
	開花	着生数	発生数	長さ	果数	果重
久落H型	10・25	5.8	22.4	35.9 <sup>cm</sup>	25.5	2.0 <sup>kg</sup>
夏系1号	10・15	4.6	22.4	11.1	23.3	2.2
夏系2号	10・17	4.6	24.0	23.0	22.7	2.2

a 第2節までの長さ

第2表 半促成栽培における生育ならびに収量(1970年)

項目 品種	主枝雌花		側枝 <sup>a</sup>		収量(株当たり)	
	開花	着生数	発生数	長さ	果数	果重
久落H型	4・13	6.4	16.3	26.5 <sup>cm</sup>	29.3	3.8 <sup>kg</sup>
夏系1号	3・27	7.3	15.7	3.7	21.1	2.5
夏系2号	4・1	4.5	18.6	16.8	37.2	4.2
夏埼落3号	4・3	7.4	17.6	24.9	42.5	4.1

a 第2節までの長さ